

話 題

第5回世界水産学会議開催報告

渡部終五¹, 佐藤秀一²

¹東京大学大学院農学生命科学研究科,

²東京海洋大学海洋科学部

この度、社団法人日本水産学会と内閣府日本学術会議の共同主催ならびに独立行政法人水産総合研究センター（水研セ）の支援で第5回世界水産学会議を平成20年10月20日～25日にパシフィコ横浜国際会議センターにおいて開催しましたので、報告します。なお、10月22日には、記念式典が開催され、天皇皇后両陛下の御臨席を賜りました。世界水産学会議（World Fisheries Congress: WFC）は世界水産学協議会（World Council of Fisheries Science: WCFS）が主宰するものであり、1992年に第1回大会がギリシャ（アテネ）で開催されて以来、4年ごとに開催されてきました。日本は、水産学、水産業の分野で世界の先導的役割を果たしてきた実績から、日本開催の機運が強まり、2004年5月の第4回WFC開催（バンクーバー、カナダ）の際に、WCFSで了承されました。日本における開催で、世界各国の研究者が一堂に介し、最新の研究成果について、報告・討論することにより、世界の水産学の現状を理解し、将来の水産学・水産業のあるべき姿を模索すること、ならびに水産学の発展に大きく資することが期待されました。

本大会（第5回WFC, WFC2008）は、「世界の福祉と環境保全のための水産業」をメインテーマに、①漁業と資源生物学、②水産増養殖、③バイオテクノロジー、④ポストハーベスト、⑤水圏生態系における物質循環、⑥淡水・沿岸および海洋環境、⑦生物多様性と資源管理、⑧漁業経済と社会、⑨水産教育と国際協力のセッションで、口頭とポスターにより研究発表と討論が行われました。

本会議に先立ち、10月19日および20日の2日間に亘り、発展途上国の若手研究者の育成の為にGIS（Global Information System）のトレーニングコースが2ヶ所で開催され、合計約60名が研修を受けました。また、パシフィコ横浜国際会議センターで20日の15時より登録が始まり、18時よりウェルカムレセプションが行われました。翌21日の9時より、開会式がパシフィコ横浜国立大ホールにおいて行われ、大会実行委員長（渡部終五）、日本水産学会会長（會田勝己）、日本学術会議副会長（鈴木興太郎）、WCFS会長（隆島史夫）、同副会長（Barbara Knuth）より挨拶がありました。また、アジア水産学会元会長の廖一久氏より祝辞が述べられ、水研セ理事長（中前 明）から閉式の辞が述べられ

ました。開会式に引き続き、基調講演が2題、野村一郎氏（Fisheries management: Status and challenges）およびJohn Field氏（Exploring the BOFFFF hypothesis using a model of Southern African deepwater hake (*Merluccius paradoxus*）よりなされました。なお、前日からの基調講演は会場を会議センターメインホールに移し、22日はChua Thia-Eng氏（A tale of tow initiatives: Integrated coastal management in Xiamen and Batangas Bay Region）、Michael Crawford氏（The role of docosahexaenoic and arachidonic acids as determinants of evolution and hominid brain development）、23日はGudrun Marteinsdottir氏（Effect of fishing on inter and intra stock diversity of marine resources）、24日はBenjamin Koop氏（Salmonid genome research: application for aquaculture, conservation and the environment）によりなされました。ただ、残念ながらRay Hilborn氏の講演は体調不良により取り止めとなりました。

22日には、午前中に基調講演、一般発表がなされました。午後には天皇皇后両陛下、野田聖子内閣府特命担当大臣（科学技術政策担当）、中田宏横浜市長の御臨席を賜り、国立大ホールで記念式典が開催されました。まず、大会委員長、日本水産学会会長、日本学術会議会長（金澤一郎）およびWCFS副会長から挨拶が行われました。続いて、天皇陛下よりお言葉を賜りました。その内容は以下の通りです。

この度、第5回世界水産学会議が、国の内外から多数の参加者を得て、横浜で開催されることを誠に喜ばしく思います。

世界水産学会議は、1992年に初めてギリシャで開催され、その後4年ごとにオーストラリア、中国、カナダと巡り、今回日本で開催されました。多くの我が国の研究者が、ここに集う世界の研究者と会議の席を共にし、研究について話し合う機会を持つことは、我が国の水産学の発展のためにも極めて意義深いことと思います。

人類は、古くから多くの水産生物を食料などに利用してきました。しかし近年、日本を始め各地で、乱獲や環境悪化の結果、水産生物資源の減少が顕著になってきております。戦後の我が国の発展において、工業生産は大きな役割を果たしましたが、その一方で、海の汚染や水産生物の繁殖場の喪失をもたらしました。水産生物の繁殖に重要な役割を担う我が国周辺の藻場の面積は、この30年で4割も減少し、我が国周辺の海の生産力は低下しました。このような海の環境を改善し、資源管理を十分に行い、水産生物を豊かにするために、今日水産学上



の様々な研究が行われています。そして、その研究を基にした取組が行われていることは非常に心強いことです。我が国ではかつて、海岸沿いに魚付林として伐採を禁じられた森林が各地にありましたが、19世紀半ば以降その多くが伐採されてしまいました。しかし、近年水産学上の見地から森林の働きが見直されるようになり、河川の上流に漁業者が植林するようなことも行われています。

水産学が研究対象とする海は世界をつなげています。その海の環境を守り、水産生物を持続的に利用していくためには、世界の水産学者の国境を越えた協力が重要と思います。水産業に関係する様々な分野の英知が結集され、その成果が人類の幸せに資することを願い、記念式典に寄せる言葉といたします。

以上のように、天皇陛下のお言葉は、水産学の重要性を述べられたものであり、我々研究者にとって、非常に感激するものでありました。

続いて、内閣府特命担当大臣の野田聖子氏より御挨拶があり、閉式の辞が水研セ理事長より述べられました。記念式典の後、天皇皇后両陛下を囲んだレセプションが隣接したホテルの会場で開催されました。

23日には、基調講演、口頭発表および後半のポスター発表が行われた後に、大棧橋ホールにて、交歓会が

開催されました。松沢成文神奈川県知事、中田 宏横浜市長より祝辞を頂いた後に、アメリカ水産学会の国際賞の発表、本会議のメモリアルブックの紹介がなされ、NOAAのGary Sakagawa氏より乾杯の発声がなされました。歓談中に北里大学の児玉正昭氏を中心とするジャズバンドや和太鼓の演奏があり、会場は非常に盛り上がりました。本交歓会には1,100人以上の方が参加し、かつてない規模となり盛会の内に開催となりました。

24日は、基調講演、一般発表が行われた後に、全体のPlenary discussionが行われました。実行委員の有元貴文氏より総括がなされた後に活発な意見が述べられました。続いて閉会式が執り行われ、本会議における学生優秀ポスター賞が発表されました。大会実行委員長の内会の辞が述べられ、次回大会実行委員長でイギリス諸島水産学会副会長のMichel Kaiser氏より、2012年5月にイギリスのエジンバラで開催予定であることが紹介され、無事に横浜パシフィコでの本会議は終了しました。

さらに25日には、横浜開港記念会館にて市民公開講座が開催され、約60名の参加がありました。また、サテライトシンポジウムが本会議を前後するように各地でつぎのように開かれ、活発な討論がなされました。17日には、横浜市みなとみらいクイーンズタワーで、「第12回東アジア鰻資源協議会と国際シンポジウムEEL2008 横浜：ウナギの保全に関する学際研究」が、18, 19両日に東京大学農学部弥生講堂で「第5回日本魚病学会国際シンポジウム－持続的養殖における魚病学の役割」が開催されました。また、25, 26日には横浜市開港記念会館で「マグロ養殖の現状と今後の展開」が、水研セ中央水産研究所で「第1回国際アサリシンポジウム－資源増殖と管理」が、27日には水研セ中央水産研究所で「水産物の安全性に関する国際シンポジウム」が開催されました。

本大会の一環として、22日、23日にはみなとみらい地区新港5号岸壁で、水研セ漁業調査船蒼鷹丸が公開されました。英語説明ツアーには72人、自由見学には514人の合計586人が調査船を見学しました。

最後になりますが、20日から24日まで、横浜パシフィコ国際会議センターで開催された本会議には、56の外国から500人以上、国内から1100人の合計1600人を超える多くの参加があり、約1,200題の研究発表がなされ盛大な大会となりました。また、学生の参加も500人を超え、本大会の目的の一つである、「若手の育成」につながったと思われます。本大会を開催するに当たって、多くの協賛、寄付金を賜りましたことに感謝申し上げます。また開催中は、多くのボランティアの協力を各大学、水研セより頂き、開催できたことに、重ねて感謝申し上げます。なお、次号にはより詳しい開催の経緯や本大会の状況等について、報告する予定です。